

現代日本語の敬語の機能と ポライトネス

——「上下」の素材敬語と「距離」の聞き手敬語——

森 山 由 紀 子

1. 敬語研究とポライトネス研究の関係

1.1 ポライトネス研究からみた敬語

日本語は、人間関係に関わる言語表現として、敬語という体系を持つ言語である。一方で人間は、使用言語の中に、敬語のようなそれ独自の体系をもたなくとも、普遍的に、言語を用いて、さまざまな方法で人間関係の調整を行いながら社会生活を営んでいる。

日本語研究では、長く、敬語分類の議論に集約される、敬語の意味・機能の研究がなされてきた¹⁾が、1980年台以降、後者の、言語普遍的な対人的コミュニケーション調整の在り方を論じる、Lakoff (1975)、Leech (1983) Brown, P. and S. Levinson (以下、B&Lと略す) (1987) 等の考え方が紹介されるようになった。その中でも、特に関心を集めたのが、B&L (1987) の「ポライトネス理論」である。そこで提示された「ポライトネス・ストラテジー」とは、人間同士の相互行為において発生する、相手のフェイス（ポジティブフェイスとネガティブフェイス）を侵害する行為（FTA）を和らげ、人間関係を円滑に進めるために用いられる様々な方略である。

B&Lの分類において、日本語の敬語の使用は、ネガティブポライトネスを伝達するためのストラテジーの5番目に当たる「敬意の表明」、すなわち、Give deference という分類に位置づけられ、例を挙げて説明されている。

そのネガティブポライトネスのストラテジーとは、人間の「邪魔されたくない」という欲求（ネガティブフェイス）に配慮して用いられるストラテジーであ

る。ネガティブポライトネス・ストラテジーとしては、このほかに、「間接的に述べる」「曖昧に述べる」「相手の逃げ道を用意する」といったものが挙げられている。依頼する時に、「～してもらえないかなあ」と、否定疑問の形で伝えたり、「10時」という待ち合わせの時間の希望を伝えたあとに、「とか」という、選択の余地を残す言い方を付け加えたりといったことは、日常頻繁に経験することであろう。敬語の使用も、それらの数ある方略の一つとして分類されるということである。

ちなみに、人間の持つもう一つの欲求としては、前述のネガティブフェイスの他に、もう一つ、「承認されたい、よく思われたい」というポジティブフェイスが立項されている。相手のポジティブフェイスに配慮するポライトネスが、ポジティブポライトネスであり、それを伝達するためには、ポジティブポライトネス・ストラテジーが用いられる。ポジティブポライトネス・ストラテジーにも、数多くの類型があり、相手への関心や共感、仲間意識を伝えたり、ジョークを言ったりといった例が挙げられる。具体的には、髪型をほめたり、共感の言葉を用いたり、仲間内で通じるスラングを用いたりなど、様々に考えられる。

実際の日本語の運用において、人間関係を調整するためには、当然、「敬語の使用」だけでは全く十分ではなく、ポジティブ、ネガティブ問わず、他の様々なストラテジーを駆使して、コミュニケーションが組み立てられている。ポライトネス理論の紹介に際して、生田（1997）が、次のように述べた通り、「ポライトネス」という概念の中で、敬語の占める位置というのは、非常に小さいといえる。

……ことばのポライトネスを考えるには、敬語の用法などの言語形式にあられるものにとどまらず、インタラクションの中でポライトネスを捉える必要がある。単に文表現レベルでの言語形式を丁寧にしたり、間接的にしたりということだけでなく、どのように会話（やり取り）を進行するかという点でも、私達はポライトネスを考えて言語使用を行っているからである。

（生田 1997・p 69）

ただ、日本語には、敬語という形式があり、また、敬語についての長い研究史があったため、B&Lの理論が紹介された際に、当初、敬語の研究との混同が生じたこと、その後、徐々に敬語研究とは一線を画してポライトネス・ストラテジー（言葉のポライトネス＝配慮表現）の研究が行われるようになったという経

緯については、山岡・牧原・小野（2010）に詳しい。

その後、次第に確立してきたポライトネス研究において、敬語というのは次の記述に見られるように、その用法が決まっているものとされ、「ポライトネス」としては取り上げられない傾向もある。

人に話しかける際に、相手が目上なのか目下なのか、親しい人か疎遠な人か、対人関係の判断さえ行えば、それに従ってどのような言語形式を選択するかは自ずと決まってくる。この時に選択される表現群が敬語表現の体系である。話しかける発話の内容や目的は、表現の選択にあまり関与しない。

（山岡他 2010・p5）

一方で、「守られていて当たり前だけれども、それが失われた時にポライトでないと捉えられるもの」を、有標ポライトネスに対して無標ポライトネスととらえ、基本状態からの離脱や回帰などの「動き」で、日本語の敬語の使用、非使用の問題をとりあげたものが、宇佐美（2001）ほか、一連の論考である。この、宇佐美の「ディスコース・ポライトネス」の考え方に基けば、敬語のような、「それが守られて当たり前」のものであっても、談話におけるポライトネスの表現としての機能を考えることが可能になる。ポライトネス研究の立場からの「敬語」への有効なアプローチである。

1.2 敬語をポライトネスの表現装置であるとする考え方

では、敬語研究の側から見て、ポライトネスというのはどのように位置づけられるのであろうか。敬語がポライトネス・ストラテジーの一つとして機能することがあるとして、逆に、ポライトネス・ストラテジーは、敬語の機能のすべてなのだろうかという問題である。

敬語の機能を、ポライトネス・ストラテジーと重ねて考えたのが、滝浦（2005）である。滝浦（2005）は、その副題にある通り、ポライトネス理論を通して、敬語とは何かということを論じたものであり、敬語は、次のように定義付けられている。

敬語は距離化の表現であり、距離化とは、対象人物を“遠くに置くこと”によって、その領域の侵犯を回避するネガティブ・ポライトネスの一形態である。対象人物を遠くに置くとは、その人物を“ソト”待遇することであり、

定義上それは、その人物を脱距離化的に“ウチ”待遇することと相反関係にある。それゆえ、敬語使用の裏面にある敬語の不使用が、対象人物を“遠くに置かないこと”によって領域の共有を表現するポジティブ・ポライトネスのストラテジーとなり得る。(滝浦 2005・p 233)

たとえば、丁寧語は「聞き手との間に距離を置いて、聞き手への顧慮を表す語(同・p 237)」であり、次のような不等式で表されるとする (p 237)。

丁寧語「です・ます」 E (話し手) > E (聞き手)

※話し手の、話し手に対する共感度 (E) が、聞き手に対する共感度よりも大きい。(筆者注)

それに対して、丁寧語を用いないのは、敬語のゼロ度と呼ばれ、次のように用いられる。

敬語のゼロ度 E (話し手) = E (聞き手) (p 238)

※話し手と聞き手の共感度の間に差をつけない。(筆者注)

この、「敬語のゼロ度」の持つ「含み」には二種類あり、記録文にみられるような「視点的に中立」であること、及び、「近づける」効果による「ポジティブ・ポライトネス的な含み」とが考えられるという。

つまり、ここでは、敬語の使用 (あるいは不使用) は、ポライトネス (不使用の場合は、視点的な中立の場合もある) として位置付けられている。敬語はポライトネスの一部であり、敬語の (使用・不使用の) 機能は、ポライトネスの表現であるという考え方である。

まず、問題になるのは、滝浦 (2005) で述べられるように、敬語を「距離化」の表現であるとするのならば、これは、「敬意」という上下関係を基本とするスケールに基づいて考えられてきた従来の敬語研究の考え方に対する大きな修正であるということである。そのことは、「むすび」の記述においても、端的に述べられている。

「敬語とは何か？」この問いに対する答えとして本書は、「敬語は敬意の表現である」に代わる定義「敬語は距離の表現である」を置きたいと思う。

(滝浦 1995・p 258)

先に本稿の結論を述べるならば、この、「敬語=距離化」とする滝浦の主張は、聞き手敬語の運用に関して言えば、合理的であり、かつ、シンプルであると考え

る。つまり、聞き手敬語の機能は、ポライトネスであると言えることができる。しかし、素材敬語については、「敬語＝距離化」という主張はあてはまらない。素材敬語の機能は、B&Lが言うところの、すなわち、対人的コミュニケーション場面における、ポライトネスではないからであるというのが、本稿の主張である²⁾。

素材敬語については、次節で詳しく述べることとして、「聞き手敬語＝距離化」という部分について、詳しく見ていきたい。

まず、現代日本語の大人の会話では、聞き手が目上である場合に限らず、年下であったり、医者にとっての患者等、立場上、話し手にとって「下」に位置づけられる人物であったりしても、家族や特に親しい友人関係でない限り、聞き手敬語については、(1)ではなく、(2)のような有標の形式を用いて会話するのが標準的であるということが指摘できる。

(1) 今日は学校が休みだから、電車がすいているねえ。

(2) 今日は学校が休みですから、電車がすいていますねえ。

このように、現代日本語における聞き手敬語の運用は、必ずしも上下関係に連動しない。この現象について、敬語を「敬意」の表現だとする従来の説明では、「敬意は、上下の関係のみならず、親疎の『疎』の表現としても用いられ、この場合は、聞き手は目下ではあるけれども、親しくない相手であるため、聞き手敬語が用いられた」と、説明されるところである。

しかし、「聞き手敬語＝距離化」という考え方をすれば、たとえ聞き手が話し手から見て目下であっても、話し手が、聞き手との「距離を表す」ために、ネガティブ・ポライトネスとして敬語を用いたものとシンプルに説明できる。

もっとも、「聞き手敬語＝距離化」という考え方については、次のような反論も考えられる。

すなわち、(2)のような敬語を用いる表現は、目下に対して常に用いられるわけではない。上司が部下に、教師が生徒に話す場合などには、やはり、(1)のような、敬語を用いない表現が選択される場合も数多くある。この場合、「聞き手敬語＝距離化」という考え方に立てば、部下や生徒は、話し手である上司や教師から共感度の高い「ウチ待遇」がされていると説明される。それに対して、部下や生徒が、上司や教師に向かって、(1)のような無敬語の表現を用いたと

するならば、その結果は、「ウチ待遇」として共感度の高さを表すというよりも、「失礼」なことであると判断されてしまう。すなわち、敬語の運用のルールには、その根底に、上下関係に基づく非対称な関係が存在すると言わざるを得ない。だとすると、聞き手敬語であっても、「上下」の関係が根底にあるとは考えられないのか。

しかし、次の記述から、滝浦（2005）が言う、「敬語＝距離化」の考え方は、それとは異なる観点に基づいていることがわかる。

たしかに敬語は敬意を表現する。しかし、敬語というシステムが直接表示するのは〈距離〉であり、距離が第一義的に示すのは、対象人物との関係が〈視点〉を介して“ソト”的（疎遠）であるか、“ウチ”的（親密）であるかの対立である。敬語において表現される敬意とは、話し手が距離を置き、“相手の領域を侵さないこと”によって間接的に示される、結果ないしは効果としての含みのことなのである。（傍線筆者）

つまり、聞き手が「上位」であることは、聞き手敬語が発動される「原因」とはなるけれども、その結果示される「結果ないしは効果としての含み」ではない。聞き手が上位であっても下位であっても、聞き手敬語を用いた結果として表される「効果」は、「上位である」ということではなく、「距離化されている」「ソト（疎遠）である」ということだということが着目されているわけである。聞き手敬語は、結果としてその人を「上位者」として表現するために用いられるのではなく、「遠い」存在として位置付けることによって、ネガティブ・ポライトネスを表現するために用いられる。すなわち、語用論的に考えるならば、やはり、「（聞き手）敬語＝距離化」であり、その結果示される効果はネガティブ・ポライトネスであると考えて差し支えなく、また、現状を良く説明するものであると言える。

1.3 敬語の機能はポライトネスだけではない。

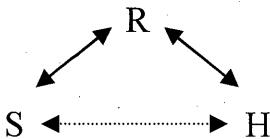
ただし、このように、敬語の機能を「距離化」に一元化するという考え方は、あくまでも「ポライトネス」の概念が対象とする場面、すなわち、対人的コミュニケーション場面における敬語の機能についての話であり、敬語に、対人的コミュニケーション以外の目的で用いられる機能があるか否かということについて、

滝浦（2005）では、踏み込まれていない。

「対人的コミュニケーション以外の目的で用いられる」敬語とは、所謂「素材敬語」のことである。

B&L（1987）では、確かに、日本語の素材敬語（Referent Honorifics: RH）も、例としてとりあげて説明しているが、あくまでも、聞き手に対するポライトネスという観点から取り上げたものである。

具体的には、客に対応している日本の店のセールスマンが、店長（彼の雇用主）に敬語で言及することができないという、社外の人物に対して、社内の人物についての敬語抑制が働くという例である。そこでは、下図に示される通り、話し手は、「話し手-素材（referent）」関係を示すことによって、「話し手-聞き手」関係を示すと説明している。（P.182）



R=Referent（素材）
S=Speaker（話し手）
H=Hearer（聞き手）

この説明は、対人的コミュニケーション場面での素材敬語の働きを示したものであり、対人的コミュニケーション場面のみを問題とする「ポライトネス」の立場からはこれで正しいといえる。しかし、「敬語」を考える立場からすれば、尊敬語・謙譲語といった素材敬語の機能が、これですべてであるとは到底考えられない。

なぜならば、聞き手敬語が、対人的コミュニケーション場面に参画することが想定される相手に向けてのみ用いられるのに対して、素材敬語は、対人的コミュニケーション場面に関与しない、所謂「第三者」に向けて用いられる場合もある³⁾からである。菊地（2008）は、「部長がいないときに同僚が、『部長はきのう相撲を見に行っただって。』というのを聞いたらどう感じるか」というアンケートに対して、「上司なのだから、たとえそこにいなくても『相撲を見にいらした（行かれた）んだって』ぐらいの言い方はすべきだと思う。」という回答が30.4%であったというアンケート⁴⁾を紹介している。「本人がいないのだからこの言い方でよいと思う。」という回答が64%であったのに比べて、34%というのは、確かに少ないとはいえる。これは、その場にはいない第三者への敬語が用いる人の割合が少ないという、現在の動向を示す資料であるとも言える。一方で、34%という回答は、日本語の素材敬語は、そ

の場にはない第三者に対しても用いられるものであり、対人的コミュニケーションを円滑に進めるための「ポライトネス」とは、別の機能を持つということを示す資料であるともいえる。

すなわち、敬語が、B&Lの所謂「ポライトネス」の一部に過ぎないだけでなく、「ポライトネス」の機能もまた、日本語の敬語、わけても素材敬語の機能のうちの一部に過ぎないのである。

2. 素材敬語の機能

2.1 素材敬語を「距離」の表現と考える場合の問題点

では、これら、対人的コミュニケーションと関わらない場面で用いられる敬語の機能とはいったい何なのか。果たしてそれを、対人的コミュニケーション場面で用いられる聞き手敬語と同様、「距離化」の表現として一元化してしまってよいものなのだろうか。

端的に言えば、素材敬語の機能は「距離」ではなく、「上下」の表現である。まず、「距離」であると考える場合の問題点について指摘する。

たとえば、現代日本語において、交差点で出会った見知らぬ人に話をする時、その見知らぬ人に対しては、(3)のように聞き手敬語を用いる。

(3) (道を聞かれて)「大学なら、この先にありますよ。塔のある建物が目印です。」

これは、滝浦(2005)の説明の通り、話し手に対して聞き手が共感度の低い人物であるからだと考えてよい。滝浦(2005)の記述に倣えば、次のように表記できるだろう。

「です」「ます」 E(話し手) > E(聞き手)

※話し手の話し手に対する共感度が、聞き手に対する共感度よりも高い。

しかし、そのことを家に帰って家族に話す時、「交差点で会った人」は、話し手にとっても聞き手にとっても、完全に「遠い(共感度の低い)」人であるにも関わらず、その人物に対して素材敬語を用いることはないが、そのことが、滝浦(2005)のように、素材敬語も聞き手敬語も距離化に一元化する方法では説明できないのである。

(4) ? 「知らない人が道を教えてと仰ったよ。」

この例は、滝浦（2005）の記述に倣えば次のようになる。

「仰る」E（話し手）=E（聞き手）>E（動作主）

※話し手に対する話し手の共感度と聞き手に対する共感度に差がない。

※聞き手に対する共感度が動作主に対する共感度よりも大きい。

ここで示される関係は、「家族は道で出会った知らない人よりも共感度が高い」という現実の関係と何ら矛盾を生じているわけではない。にも関わらず（4）の表現が用いられないのはなぜか。

また、上記の例は、対人的コミュニケーション外の人物を対象に用いられる素材敬語の問題であるが、対人的コミュニケーション場面において用いられる素材敬語についての説明にも、問題がある⁵⁾。それは、

（5） あなたもいらっしゃる？

のように、聞き手としての「あなた」には敬語を用いないにもかかわらず、動作主としての「あなた」に対しては敬語を用いる例の説明である。滝浦（2005）で、この文は、次のように説明されている。（p 245～6）

尊敬語使用 E（話し手）>E（動作主 i）

丁寧語不使用 E（話し手）=E（聞き手 i）

（i は、それを付した人物が現実には同一人物であることを示す。）

→E（話し手）=E（聞き手 i）>E（動作主 i）

ここでは、動作主 i との間には距離を置くが、聞き手 i との間には距離を置かないという関係の取りようが表されている。そこから生じる語用論的含意は二通りあり得る。一つは、動作主の行為には距離を置けけれども聞き手との間には距離を置かないという方略によって、ポジティブポライトネス的な“親密さ”の含みを表現するというものであり、もう一つは、それなりに置かれるべき距離を無視して聞き手を“われ=われ”関係の内に取り込んでしまうことにおいて“不敬”の含みを帯びてしまうというものである。聞き手がどちらのニュアンスにおいて受け取るかは人間関係や場面に依存することであり、言語それ自体の内どちらと決する要因があるわけではない。

つまり、同一人物に対して、聞き手としては距離を置かないけれども、動作主としては距離を置くということが表現され、その語用論的な効果として、① ポジティブポライトネス的な親密さの含み、② 置かれるべき距離を無視した不敬

の含みが考えられるというのである。しかし、この含意の解釈には様々な疑問が生まれる。

まず、① 一方に距離を置いて、一方に距離を置かないことによって、ポジティブポライトネス的な親密さの含みが生まれるとするならば、それは、本来距離を置くべき人物に対して、一部、距離を縮める表現を行ったということになるだろう。だとするならば、ここまでのこの二人の会話は、距離を置く表現を取ることが標準だったということになるのではないか。しかし、通常の会話で、この表現の前後では、聞き手敬語が用いられるのが普通で、ここだけ聞き手敬語が使われなかったという状況は考えられない。むしろ、聞き手が動作主として登場した、この時点において、初めて聞き手に対して敬語が用いられたと考えるのが普通ではないだろうか。だとすると、ここは、むしろ、距離を置くネガティブポライトネスの表現になってしまう。

また、②の場合にしても、こういった表現が生まれるのは、大変親しい間柄でのことなので、それが不敬であるという状況も考えにくい。

2.2 素材敬語は「上下」の表現である

前節に述べたような問題点は、聞き手敬語は「距離」の表現であり、素材敬語は「上下」の表現である⁶⁾と考えることによって解消する。より厳密に言えば、「素材敬語は、話し手が、話し手と素材との間に素材を上位とする相対的な上下の関係があることを表す表現である」と考えるのである。

まず、前節で述べた

(4) ? 「知らない人が道を教えてと仰ったよ。」

という例が普通用いられないのは、次のように説明することができる。交差点で会った人は、距離の軸で考えれば、話し手にとって「遠い」間柄であるけれども、それは、素材敬語に反映されるものではない。素材敬語は、話し手と素材との間の相対的な上下関係を反映するものであり、(4) の例では、話し手と素材との間に上下関係が存在することを話し手が認めていないため、素材敬語が用いられないと考えられる。

それに対して、次の(6)のように、話し手が、話し手と素材との間に相対的な上下の関係(この場合は、話し手から見て先生という関係)が存在することを

認めている場合には、素材敬語を用いることができる。

(6) 先生が道を教えてと仰ったよ。

さらに、前節で、「敬語＝距離」と考えることでは解決できないと述べた、

(5) あなたもいらっしゃるの？

という例についても、話し手は、聞き手敬語を用いないことで、距離の近さ、すなわち聞き手との親しさを表し、同時に素材敬語を用いることで、話し手と素材（この場合は聞き手と共通）との間に話し手の認める上下の軸が存在し、その軸上で素材を上位に位置づけているということを表明していると考えれば、明快地説明できる。

さらにこの文は、対人的コミュニケーションの場面で発せられているので、素材敬語によっても語用論的なポライトネスが表現されていると考えてよい。聞き手の行為を、素材敬語を用いて上位に位置づけるというのは、まさに、ポジティブポライトネス・ストラテジーにはかならない。素材敬語によって相手を上位に待遇することによって、そこでは、話し手が、聞き手を上位に待遇する、「尊重」のストラテジーとも言うべき方略が行使されているのである。(5) のような、聞き手敬語を用いず、素材敬語を用いる表現によって、話し手は、聞き手に対して「脱距離化による、親密さのストラテジー」と、「上位者扱いによる尊重のストラテジー」との、二種類のポジティブポライトネスを行使しているといえる。(5) の文を、滝浦 (2005) に倣って表記するとするならば、E = 「共感度」の関数に対し、P = 相対的上下関係 (Power) の記号⁷⁾を用いて、次のように表すことができる。

E (話し手) = E (聞き手)、 P (話し手) < P (聞き手)

2.3 聞き手への顧慮による素材敬語の用法の制約と拡張

このような、素材敬語が上下の関係を表すという考え方に対しては、滝浦 (2005) が問題にし、敬語の機能を距離に一元化することの根拠とした (7) (8) のような、身内の人間に対する素材敬語使用の抑制という現象が、反例として挙げられることが想定される。

(7) 「*私のお父さんがそう仰っています。」

(8) (取引先の人に) 「*例の書類うちの課長にお渡しておきました。」

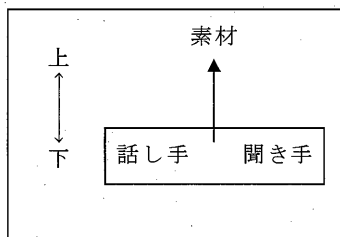
距離に一元化することでこの現象を説明した滝浦（2005）の考え方⁹⁾に対して、素材敬語を「上下」の表現と考えるだけでは、この例が不適切なことは説明できない。

たとえば、(7)の例は、聞き手に対して、「距離」（遠さ）を表し、年齢の高い自分の父親に対して、「上下」の軸上の相対的な上位を示した例となるわけで、この限りにおいて、ここで「仰る」という素材敬語が使えないことは説明できないと思われるのである。

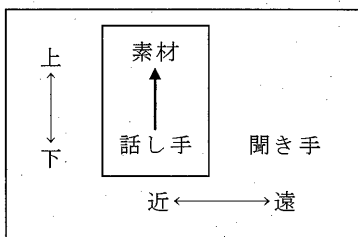
しかし、この問題は、次に述べるように、現代敬語においては、話し手が認識する「話し手と素材との間の相対的な上下の関係」を表明して良いか否かが、聞き手との関係によって決定されると考えることで解決する。

(6)「先生が道を教えてと仰ったよ」という例と、(7)「私のお父さんがそう仰っています」という例を比べて、何が違うかを考えれば、(6)は、素材が話し手にとっても聞き手にとってもソトに位置するのに対して、(7)では、話し手にとってはウチであり、聞き手にとってはソトに位置するということである。これは、次のように図示することができる。

(6) 素材敬語アリ



(7) 素材敬語ナシ



上記の(6)と(7)の素材は、先生と父親なので、どちらも話し手との間に相対的な上下関係が存在する。しかし、聞き手との関係で考えると、(6)の場合は、聞き手にとっても同じ立場で上位としてとらえられるのに対し、(7)の場合は、聞き手にとっては「関係のない」関係なのである。すなわち、話し手は、素材を上位であると表明するにあたって、自分の有している上下関係が、聞き手にも関与する上下関係であるかどうかということを顧慮しなければならないのだと考えられる。この場合、

「聞き手にも関与する」とは、単に、聞き手にとっても上位ということではない。例えば、

(8) (社長に対して平社員が)「課長がそう仰いました。」

という例は、次のように図示することができる。この場合、素材は、聞き手にとって下位にあたるけれども、話し手(平社員)と素材(課長)と聞き手

(社長)とは、すべてウチ関係なので、話し手は、聞き手への配慮をすることなく、素材に対して素材敬語を用いることができる。

こういった聞き手への顧慮という制約は、古典語の敬語には基本的に見られないものであり、現代敬語の特徴であるといえる。

なお、これに関連する議論として、菊地(2008)は、現代敬語においては、「上下敬語性」が弱化し、「距離の表現」「配慮の表現」など、「敬語の多面化」が進んでいるとする⁹⁾一方、

ただし、敬語(特に「話題敬語」)

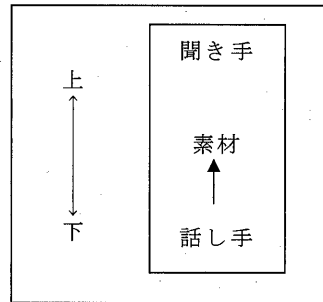
の「基本義」そのものは、やはり、『上下』だと見る必要があることにも目を向けておきたい。

と、「敬語の基本義」は「上下」だという指摘をしている。本稿は、対人的コミュニケーション場面で用いられる聞き手敬語は「距離」を表すポライトネス表現であり、素材敬語が、「上下」を表す表現であると考えたが、菊地の主張においても、「特に話題敬語」と指摘されていることから、菊地の主張は、本稿の主張に通ずる面を持つ。

2.4 素材敬語の「上下」と他のダイクティックな表現の違い

前節において、素材敬語とは「上下」の表現であるということを述べた。また同時に、素材敬語とは、聞き手に対して用いる場合や、聞き手への顧慮が働く場合を除いて、対人的コミュニケーション場面における関係調整、すなわち、ポライトネスとして機能するものではないということも述べてきた。それでは、素材

(8) 素材敬語アリ



敬語における「上下」の表現の機能とは何か。果たしてそれは、「敬意」と言ってよいものなのか、また、「敬意」とは何なのか。

極端な考え方としては、素材敬語の使用は、英語における三単元のSのような、人称に応じたルール、すなわち、文法的な制約に過ぎないという見方もあるだろう。しかし、たとえば尊敬語を適切に使うということは、三単元のSを適切に使うこととは違う。三単元のSを用いないことは、言語使用上の間違いであるが、敬語を適切に用いなくても、それは「間違い」とはならない。

また、「ここ」や「来る」といったダイクティックな表現と同じであるという見方も想定できる。確かに、素材敬語の使用は、素材と自己との「関係」の表明であるという点で、空間や時間に関するダイクティックな表現と共通した側面を持つ。

しかし、次の二点において、現代日本語の素材敬語は、空間的・時間的なダイクティクスとは異なるといえる。

第一に、空間的・時間的なダイクティクスが適切に用いられなかった場合に生じるのは、情報伝達上の不都合であるのに対して、素材敬語を適切に用いなかった場合には、情報伝達上の不都合だけでなく、人間関係維持の面での不都合も生じるという点である。

たとえば、同僚同士のメールのやりとりのつもりで、共通の上司である課長について、(9)のように、上司に対する尊敬語を欠く無標の表現を用いて、それが、誤送信によって課長に送られてしまったとする。

(9) 今日、課長は来ませんでした。

たとえそれが、課長を聞き手として発せられた文ではないことが双方に理解されていたとしても、それに気づいた送り手、または、受け取った課長は「不適切さ」を感じる。そして、その「不適切さ」は、情報伝達に関わる「間違い」とは異なる¹⁰⁾、「失礼 (impolite)」と表現される「不適切さ」である。

第二に、素材敬語は、話者を基準として、話者から見た素材の位置付けを表すばかりでなく、素材を基準とする話者の位置付けをも表すという点で、空間的、時間的なダイクティクスと異なっている。「ここ」とか、「明日」といった表現は、話し手の位置を基準にある地点を指し示すが、それが同時に、話し手の位置をも規定するという事はない。それに対して、素材敬語は、それを用いることに

よって、話者に対する素材の位置付け、素材に対する位置づけの両方、すなわち、相対的上下関係が規定される。

このことを、さらに敷衍して言うならば、空間や時間の指示と異なり、素材敬語を含めた敬語の使用不使用は、E. Goffman (1967) が、相互行為儀礼の要素として「敬意表現 (deference)」に並ぶ基本的要素として指摘した、人間の「品行 (demeanor)」に関与しているということになる。

ゴフマンは、相互行為儀礼には、「敬意表現」と「品行 (demeanor)」との二つの要素があると述べた。敬意表現とは、「相手についての高い評価を適切に当の相手に対して伝える手だてになる行動 (p 57)」であり、「品行」とは、「その場にいる人たちに対して、自分がまわりから見て望ましい性質を持っている人間であること、を実現すること (p 77)」であるという。

この、「敬意表現」と「品行」には、重複する面があり、「人が他人に敬意を示したり、示すのを控えたりする行為は、その人が良い品行の人あるいは悪い品行の人である事実をその当人が表現する典型的な手だてになる。(p 82)」とされる。

聞き手敬語を適切に使用することは、聞き手に対する自己の「品行」を示すことである。それと同様に、三人称に対する素材敬語の使用もまた、自己の「品行」を示すことであるという的な側面を持ち、その点において、空間や時間を指し示す他のダイクティックな表現と一線を画しているといえる。空間や時間を指し示すダイクティクスを誤って使用しても、話し手が悪い品行の人とされることはないけれども、素材敬語を適切に使用しなければ、話し手は悪い品行の人となるからである。

もっとも、品行に関与するという点で言えば、たとえば、「正しい (役割に応じた) 言葉遣いで話す」といったこともそこに含まれる¹¹⁾。しかし、素材敬語の使用は、より直接的に品行に関わる。なぜならば、上で第二の特徴として述べたように、素材敬語は、話者に対する素材の位置づけをも示すからである。

これはすなわち、素材を媒体とする社会的な文脈の中で自分を位置づけるということであり、素材敬語を「適切に」用いないということは、聞き手も含めたその場にいる人々、さらには、暗黙のうちに存在する社会の「規範」に対する、「悪い品行」となる。このように、言語表現によって常に社会の中での自己の位置づけを行う必要がある¹²⁾ということが、現代日本語の特質であるということも

できるのではないか。

3. まとめ

以上現代日本語の敬語の、語用論的機能を考察した。その結果、対人的コミュニケーション場面でのみ用いられる聞き手敬語は、滝浦（2005）が指摘するように、話者と聞き手との「距離」の表現であり、それを使用したり使用しなかったりすることによって、「距離化」「脱距離化」による、ポジティブ、あるいはネガティブなポライトネス・ストラテジーとして機能する。それに対して、発話場面に登場しない第三者に対しても用いることの可能な素材敬語は、対人的コミュニケーション場面における「(B&Lの所謂)ポライトネス」以外の機能を持つ。それは、「話者から見た、話者と素材との相対的上下関係の表現」である。ただし、それが、対人的コミュニケーション場面で用いられる場合には、聞き手への顧慮によって、用法上の制約や拡張が生じる。

この、素材敬語によって表現される「上下」とは、「(話者から見た)素材の社会的位置づけ」を表すものであると言えるが、空間的、時間的ダイクティス等とは、次の二点において異なる。第一には、その適正な使用が、話し手の「品行」の表現となる点、第二には、それが、素材を位置づけるだけでなく、素材を媒介して、話し手の位置づけとしても働くという点においてである。従って、素材敬語とは、客観的な序列の認識の表明にとどまらず、聞き手敬語と同様、人間関係を調整する機能としての働きを持ち、それは、広い意味での——「(B&Lの所謂)ポライトネス」とは異なる——「丁寧さ」であるといえる。

滝浦（1995）菊地（2008）が指摘するように、現代日本語における素材敬語は、聞き手敬語が使用される場面でなければ、使用されないことが多くなりつつある。これは、例文（5）のようなウチ・ソト意識による素材敬語の使用抑制のような現象が見られるようになるのは、近年のことであるといった事実も含め、日本語の敬語を歴史的に見れば、素材敬語優勢の時代から、聞き手敬語への傾斜という流れに沿うものであるということは、上記の論考をはじめ、多く指摘されている。

そもそも、奈良時代以前には、日本語の敬語体系には、素材敬語しか存在せず、その後、素材敬語が対人的コミュニケーション場面に転用され¹³⁾、そこから聞き手敬語として素材敬語とは別に文法化していったと考えられる。その過程におい

て、聞き手敬語の「距離化」の機能、素材敬語の「上下関係位置づけ」の機能は、どのように変化、あるいは発達して今に至るのか。また、対人的コミュニケーション場面における素材敬語の運用に際しての聞き手の関与は、いつごろどのように始まったのか。こういった問題は、歴史語用論としての、また、日本語の現代敬語の在り方を理解するための興味深い課題として、今後解明していかなければならない。

注

- 1) 「言語生活」の分野では、挨拶の研究など、より広い、人間関係に関わる表現についての研究もなされてきた。
- 2) 井出 (2006) は、日本語の敬語には、B&Lのような能動的な要素ばかりでなく、そうあるべきという「わきまえ」に基づいて使用される側面があるため、B&Lのポライトネスの議論にはおさまらないものであるということ述べた。前に述べたように、B&Lの言う「ポライトネス」が、対人的コミュニケーションにおけるFTAを回避する行為だという前提からすれば、敬語はその一部に過ぎないわけで、敬語が持つ他の機能をそこに加えるべきであるという主張は成り立たないのであるが、敬語とは何かという観点からすれば、これから述べるように、B&Lの言う「ポライトネス・ストラテジー」は、その機能の一部に過ぎない。井出 (2006) の議論は、そのことを指摘したものとして捉え直すことができる。
- 3) もちろん、対人的コミュニケーション場面の聞き手がたまたま素材となる場合にも用いられる。
- 4) 1999年1月実施「平成10年度国語に関する世論調査」(文化庁)より。
- 5) この文については、「敬語=敬意」と一元化して考える場合にも、同様の矛盾が生じる。
- 6) この、「上下」と「距離」という二系統は、R. Brown, and A. Gilman (1960) が指摘した、「power (力)」と「solidarity (連帯)」の二系統に対応する。
- 7) 金水 (2010) では、古代語における敬語体系には、話し手・聞き手は直接関与しないことから、滝浦の共感度の関数 E とは独立の「敬語的序列」を表す H (honorifics) という関数が用いられている。古代語の敬語は素材敬語中心であるため、ここでいう P (power) とは極めて近いものであり、今後の検討を経て統合される可能性もあると考えられるが、金水では現代語については素材敬語も含めて「距離」としてとらえる滝浦の考え方にのっとった上で、古代語の敬語についての関数として用いられている点が、現代語も含めて素材敬語全般に適用しようとする本稿の立場と異なるため、現段階では別の記号を用いることとする。

- 8) 滝浦 (2005) では、「敬語=距離」と考えることによって、(6) や (7) の例が成立しない理由が説明されている。例えば (6) は、
(仰る) E (話し手)=E (聞き手)>E (動作主)
※話し手の話し手に対する共感度と聞き手に対する共感度が同じ。
※話し手の聞き手に対する共感度より動作主に対する共感度が大きい。
という関係を表していることになり、それが、「私のお父さんに対する方が、家族外の聞き手に対するよりも共感度が大きい(距離が近い)」という、「現実の共感度関係」と矛盾を引き起こすためであるとされる。
- 9) 「敬語は、……以前は強かった『上下敬語』性を現在では相対的に弱め、その分、『配慮の表現』『距離の表現』等の面を増して『多面的な敬語』になってきている。『敬語の多面化』とでも呼ぶべき現象である。」(p9)
- 10) もちろん、敬語の使用においても、明らかな「間違い」のレベルは存在するが、それ以外に、「間違い」ではないけれども、「不適切」とであるという状況があるということである。
- 11) なお、「お布団」「お茶」などの「美化語」と分類されるものが、「敬語」の属性に含まれるのは、これらもまた「品行」に直接的に関与するからである。
- 12) 井出 (2006) が主張する「わかまえ」とは、こういった、社会の規範によって規定される自己の位置づけ方にあたるのではないかと考えている。
- 13) この転用の過程については、森山 (2010) および、森山・鈴木 (2011・予定) で詳しく述べた。

文献

生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『月刊言語 26-6』

井出祥子 (2006) 『わかまえの語用論』大修館書店

宇佐美まゆみ (2001) 『『ディスコース・ポライトネス』という観点から見た敬語使用の機能——敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること——』『語学研究所論集 6』東京外国語大学

宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論展開——ディスコースポライトネス理論構想 1~6」『月刊言語 31-8~31-13』大修館書店

菊地康人 (2008) 「敬語の現在——敬語史の流れの中で、社会の変化の中で」『文学 9-6』岩波書店

金水敏 (2010) 『『敬語優位から人称性優位へ』再考』『語文 92・93』(大阪大学国語国文学会)

Erving Goffman (1967) "Interaction Ritual-Essays on Face-to-Face Behaviour"
Anchor Books, Doubleday and Company Inc (広瀬英彦 / 安江孝司訳 2002 『儀礼

- としての相互行為——対面行動の社会学』法政大学出版局)
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論 —— ポライトネス理論からの再検討 ——』大修館書店
- 森山由紀子 (2010) 『『古今和歌集』詞書の「ハベリ」の解釈 —— 被支配待遇と丁寧語の境界をめぐって』『日本語の研究 6-2』
- 森山由紀子・鈴木亮子 (2011・予定) 「日本語における聞き手敬語の起源 —— 素材敬語の対人的コミュニケーション場面への転用 ——」『歴史語用論入門 (仮題)』大修館書店
- Brown, P. and S. Levinson (1987) "Politeness—Some universals in language usage", Cambridge University Press.
- Brown, Roger and Albert Gilman (1960) "The Pronouns of Power and Solidarity" In Thomas A. Sebeok (ed.). *Style in Language*, 253–276. The Technology Press of Massachusetts Institute of Technology and John Wiley & Sons.
- Lakoff, R. (1975) *Language and Women's Place*. Harper & Row. (かつえ・あきば・れいのるず訳 1985) 『言語と性——英語における女の立場』有信堂高文社)
- Leech, G.N. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 1987 『語用論』紀伊国屋書店)